特集　本シェルジュが読む「日本の大問題」への処方箋

第１章
チャレンジしにくい？閉塞社会ニッポン

安藤　準
埼玉県中小企業診断協会

「新型コロナウイルス」。もう何度聞いた言葉でしょうか。この２年間，日本中がコロナ禍に振り回され，変化してきました。現在も高い警戒が維持され続けていますが，ようやく「ウィズコロナ」という言葉が現実になってきた感があり，新しい社会に向けて気持ちを新たにしたいところです。

ただ，ちょっと待ってください。ほかにも忘れてはいないでしょうか。そう，日本の潜在的な問題を。新型コロナウイルスが大きく注目されすぎて忘れかけていましたが，日本社会にはさまざまな問題があったのです。そして，このコロナ禍は私たちに社会変化を促し，改めて日本の問題を浮き彫りにしてくれたようにも思えます。

オンライン社会が進んだことで，働き方は大きく変わり，企業，とりわけ中小企業の経営戦略は大きく変化しました。たとえば，デジタル化が進んでいない企業はテレワークやマーケティングへの対応を迫られました。また，地方と都会が分断されたことで意識も変わりました。人事制度，地方創生，マーケティング，デジタル化。考えてみれば，今の日本には多様な問題があったのです。

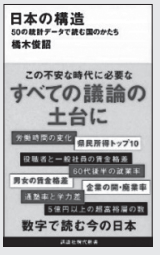
そこで今回は，日本の問題を再整理するため，改めて日本の問題を見つめ直す本を，ビジネス書の情報を発信している本シェルジュメンバーより紹介して考察していきたいと思います。第１章では，日本全体の状況を捉えて，起業の問題を考察していきます。

１．改めて考えたい日本の基本構造

さて，日本の問題とはいったい何なのでしょうか。コロナ禍で経済面，社会面も大きく変化したと考えられます。今，改めて中長期的な視点で，日本の構造を把握しておきたいと思います。

まず，ご紹介したいのが，日本の現状をデータから客観的にまとめている一冊です。出版時にすでにコロナ禍に関連したデータを一部利用していて，改めてアフターコロナとしての日本の社会構造をまとめています。

日本の構造
―50の統計データで読む国のかたち



橘木　俊詔　著
講談社

コロナ禍も踏まえて，統計データから日本のかたちに迫ろうとする本。コロナ関連のデータはまだ少ないものの，改めて日本の課題を分析し，今の日本の状況を手軽にかつ客観的に把握することができる一冊である。

ここからは，本シェルジュのメンバーである三上友美恵さんに入っていただき，日本の基本構造の問題点について，一緒に考えてみたいと思います。

安藤：コロナ禍で社会が変わるという議論がたくさんありましたが，結局，日本社会は変わったのでしょうか。

三上：本当に変わったかどうかはわかりませんが，この２年間，「変わる点」について多様な意見が出てきましたね。

安藤：私は，自分の専門がITという点もあり，「オンライン化」が一番変化したと感じています。さまざまなものがオンライン化された印象です。

三上：そうですね。皆がテレワークによる働き方を経験し，会社によっては今でもほとんどテレワークという人もいます。ただ，生産性が上がったかは疑問です。失業率や経済への影響などは結局どうだったのでしょうか。

安藤：本書で紹介されているデータによれば，失業率が2020年の初めは2.4％だったものが10月には3.1％と増加したようです。また，GDPは2020年通年で4.8％のマイナスで，大きなダメージがあったとしています。著者は，政策が大企業や正規社員に偏っていることから，大企業と中小企業，正規社員と非正規社員などの格差は広がっていくだろうと予想しています。

三上：政策だけの問題ではない気がしますが，この格差の広がりは新型コロナウイルスがなくても言われていたことではないですか。

安藤：私もそう思います。本書では，企業規模，男女差，世代間などのさまざまな格差データをベースに，格差は是正すべき問題だという意見のようです。

三上：日本の問題という意味ではそうかもしれません。私は，バブル崩壊以降，「何となく低迷している」という日本経済のネガティブな雰囲気が問題と感じるのです。

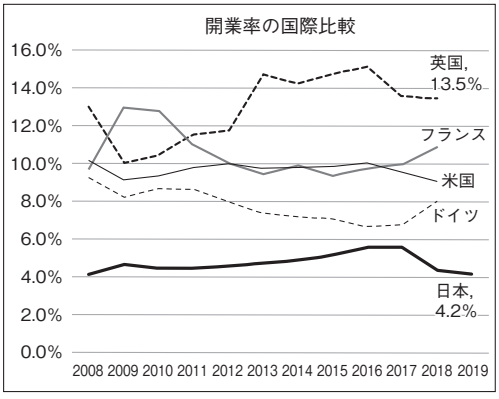
安藤：中小企業診断士の現場としては，起業のしにくさ，つまり「開業率」に注目します。古い体質や考え方の社会がなかなか刷新されない。その原因の１つが，新しい企業や事業が生まれにくいことだと思っています。

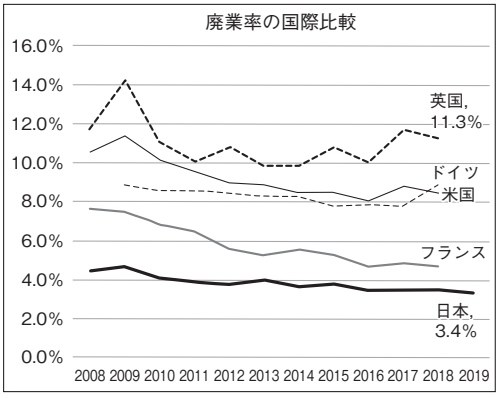
三上：たしかに，新しいものやサービスが生まれないと明るい気持ちになれないですね。

安藤：本書ではその理由として，第１に元来廃業の数が少ないこと，第２に起業リスクが大きく，安全志向の国民性があること，第３に資金調達が難しいことを上げています。第１の理由は面白いと思います。たしかに日本では，企業をつぶさないことを美徳とし，なかなか会社を畳もうとしないのです。

２．日本は開業率も廃業率も低い

日本は開業率が低いのですが，実は廃業率も低いのです。『2021年版 小規模企業白書』によれば，2019年の開業率は4.2％，廃業率は3.4％でした。若干の増減はあるもののおおむね横ばい，最近ではいずれも減少傾向にあります。





出所：2021年版小規模企業白書から筆者作成

では，国際的な比較ではどうでしょうか。欧米主要国と比較すると最低の数字です。起業に対する文化の違いや人材の流動性などさまざまな背景があり，一概に良い・悪いとはいえませんが，開業率トップの英国が13.5％という点を考えると，起業に対する活力は大幅に少ないといえるでしょう。

また，注目なのは廃業率も低いことです。開業率も廃業率も少ない。つまり，新陳代謝が進んでいないともいえるのです。

３．なぜ日本では起業が少ないのか

日本での起業が少ない点については，さまざまな背景があります。前述のとおり，リスクに対する文化や資金調達の仕組みなどもあるでしょう。しかし，そもそも日本で起業をするときには，さまざまなハードルがあります。

私の経験でも，中小企業診断士として独立し，その後に法人設立を行った際に，手続きの多さや難しさを感じました。さらに，世の中のサービスは「法人」というだけでハードルが高くなります。どのような会社でも，多くは設立当初は１人，あるいは数人だと思います。会社設立に対する温かい社会的空気は感じられませんでした。

ここで，日本の中小企業の実態をもう少し現場感覚でまとめた本を紹介したいと思います。

日本の中小企業
―少子高齢化時代の起業・経営・承継

関　満博　著
中央公論新社

少し前の2017年発行の本だが，日本の中小企業の実態をよく整理した一冊。統計データと，著者の現場経験に基づく内容は，中小企業診断士として日本の中小企業の課題を理解することに役立つ。

『日本の中小企業』は，発行は2017年ですが，そのタイトルにあるとおり，日本の中小企業の実態をまとめています。特に起業や新規事業への取組み事例を多く紹介しているのが特徴です。著者は大学教授ですが，東京都商工指導所などでの現場感覚を持ちつつ，マクロな視点で日本の中小企業の実態をまとめている点が参考になります。

本書では日本で起業が少なくなった理由の１つとして，「高齢で豊かになったから」という点をあげています。つまり，高齢化が進むと新しい活力は低下し，物質的に豊かになれば経済的豊かさを求める欲求も低下して起業数が減ったということです。たしかに，現在の社会では起業によって富を得るというモチベーションは下がっているかもしれません。

安藤：三上さんはお金持ちになりたいという欲求はありますか。

三上：もちろん，お金はあったほうがよいでしょう。しかし，お金よりも大事なこともたくさんありますし，ある程度のお金があればそれなりに幸せな気もするのですが。

安藤：今の世の中には，安くて良いものがたくさんありますから，ある程度の収入があれば衣食住で困ることはまずないです。

三上：たしかに。しかし，普通は，独立開業するときには高収入を得たいという気持ちはあるのではないでしょうか。安藤さんはなぜ独立・開業しようと思ったのですか。

安藤：たしかに，経済的に豊かになりたいという欲はありましたが，振り返ってみると，それ以上に「自分自身で好きな仕事を自由にやりたい」という欲求だったのかもしれません。つまり，自由に生きる，やりたい仕事をする，ということでしょうか。

三上：「自分らしく生きる」ということですね。

安藤：でも，それは実はかなり難しいことだと思います。今でも常に考えさせられます。

三上：独立に限らず，「自分らしく生きる」というのは難しいテーマですね。

4.「自分らしく生きる」は無理ゲーか

起業を目指す理由に，経済的に豊かになりたいということはあるでしょう。しかし，最近の起業理由，あるいは若い人の仕事の選び方には，経済的豊かさよりも「社会貢献がしたい」，「やりがいある仕事がしたい」など仕事の意義や内容を重視する傾向があるようです。

私も毎年，研修の仕事で新入社員と接する機会がありますが，その傾向は強く感じます。自分の人生をやりがいあるものにしたいという「自分らしく生きる」というモチベーションが高まっていることを感じます。

ただ，この「自分らしく生きる」ということは可能なのでしょうか。この点，「全員が自分らしく生きることは難しい」という意見の本があります。3冊目にご紹介する本は，『無理ゲー社会』です。

無理ゲー社会

橘　玲　著
小学館

他の著作でも世の中で言いにくいことを忖度なしでずばり論じる著者は，本書でも「能力はある程度遺伝で決まる」を前提に「自分らしく生きる」という現代の価値観とその難しさについて論じている。一定の納得感があり，日本において起業することに対するヒントがあると思われる。

近年の社会変化に伴う「自分らしく生きる」という呪縛を「自分さがしという新たな世界宗教」と評して，その難しさを論じています。遺伝的に能力の多くがある程度は決まっているという前提で，社会における公平と平等の両立の難しさを主張し，社会構造の変化と今を生きる人たちの意識変化をユニークな視点でとらえていて参考になります。

安藤：日本社会は平等だと思いますか。

三上：難しい質問です。普通に答えれば不平等でしょう。親や土地，環境はなかなか選べません。「公平か」と問われれば，少しニュアンスは変わりますが。

安藤：そうですね。この本でも結果を同じにする「平等」と機会を同じにする「公平」の両立は困難なため，格差をはじめ平等にしようとするのは無理があるという主張です。そのため，皆が自分らしく生きるのは難しいともいっています。

三上：それは少し寂しいです。

安藤：そうですね。著者はさらに，不平等であることよりも，「無理に生きがいを探させている」ことのほうが問題だという意見です。大学の学生キャリア支援を行う現場で，若者が夢を持つよう強要され，夢に押しつぶされる実態を「ドリーム・ハラスメント」という言葉で紹介しています。

三上：ドリーム・ハラスメントですか。一理あります。皆が夢を語るのは一見素晴らしいようですが，無理がある気もします。夢のない話ですが，もう少しシンプルに幸せに生きられる社会であってほしいです。

起業をはじめ，閉塞感が漂う日本。そこには，仕組みや経済だけではなく，成熟して豊かになった社会における人の価値なども関係しているのかもしれません。今はビジネスに限らず，新しい価値観に合わせた社会適用が重要といえそうです。

次章からは，別の日本の問題について本を紹介していきます。

安藤　準
（あんどう　ひとし）
2014年中小企業診断士登録。NECでシステムエンジニアとして勤務後，2015年に中小企業診断士として独立。現在は，中小企業のIT化支援や研修講師として活動している。